

希望の光再び

神炎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

光の巨人ティガ・ダイナ・ガイアがいつの日か消えて地球の人間の手で守っていたティガ・ダイナは光となり消えガイアは原因が分からず突然消えてしまった

それでも怪獣達は容赦なく向かってきた

スーパーGUTSの隊員のアサキ・ユウキは戦闘中怪獣の攻撃を受けてしまった死んだかと思いきや光に包まれ消えてしまった光の巨人へと変身した

ユウキは自分の正体を隠しながら怪獣達との戦いへを向かう
戦っていくにつれ思いもしない事がユウキに待ち受けていた

一体ユウキはどうなってしまうのか

そしてなぜユウキが光の巨人に変身したのか

目次

希望の巨人再び！

1話

1

希望の巨人再び！

1話

「……はあ」

ため息をつき空を見た

空は快晴で青空が見えていた

何も変わらない風景

良いこともあれば悪いこともある

今は2043年の5月

昔は大きな怪物が街を襲っていた

みんなは恐怖に怯え泣いていた人もいれば絶望していた人もいた

防衛軍や特殊なチームが戦っていたが歯が立たずにいた

もう終わりかと思ったときみんなの目の前には光の柱が現れ巨人が現れた

みんなはそれを『ウルトラマン』と言った

ウルトラマンは大きい怪物を倒して空の向こうへと毎回消えていったらしい

特殊なチームは『GUTS』や『スーパーGUTS』等という組織がいた

まあその二つの組織と共に戦った巨人の名前は『ティガ』と『ダイナ』

ティガは超古代戦士の光の巨人

前からティガは人々を守っていたかは正確には分からない

でも必死に俺たち地球人のために戦った

変身者はマドカ・ダイゴ

円錐の形をした機械からダイゴは光となるとか言っていたらしい

それでダイゴは邪神ガタノゾアを倒すまで戦っていた

ダイナは火星で現れた巨人

変身者はアスカ・シン

自身過剰でお調子者と言われていた

アスカのパイロットとしての腕は確かでみんなの力になっていた

でもアスカはスフィアの穴へ吸い込まれ行方不明になっていた

この二人は頑張つて地球を守ってくれた

そして俺も今のスーパーGUTSの隊員として絶えない怪獣との戦いに明け暮れていた

まあ今は休憩の時間で休んでいる

「ウルトラマン…か」

すると後ろから

・・「どうしたの？考え事？」

「アスハか。ちよつとウルトラマンの事を考えててな」

アスハ「ウルトラマンね…もういないんだし考えても意味ないでしょ？」

「そうだけどさ…ダイゴさんやアスカさんがウルトラマンになつて戦つていつて平和を取り戻したんだ。出勤する時も来てくれたらつて思うことあるんだよ」

アスハ「まあ分からなくもないよ。でも今はいない。現れないつて事は変身する人はいなくて私達で守つていかなきゃつて言われているんだし…しょうがないよ」

アスハは俺と同じ時期に入ってきた仲間
年が同じということで仲良くなった

ちなみにアスハのフルネームは『ササギリ・アスハ』

そして俺の名前は『アサキ・ユウキ』

そうやって話していると

ピピピ！　ピピピ！

俺に連絡が来たため連絡を取った

「はいユウキです」

・・・『D2の山に怪獣が現れた。至急向かってくれ！』

「分かりましたすぐ向かいます」

アスハ「どこ？」

「D2の山だと。行こう」

アスハ「ええ」

俺はガッツウイングαにアスハはγに乗り合体している状態で向かった

現場

現場を見るとそこには

「!?あれってゴルザ!!」

アスハ『うんゴルザだわ。でもなんでここに』

・『ゴルザはティガに倒されたはず。別のゴルザか』

「どうしますカイトさん」

カイト「このままあいつに攻撃をする。ユウキ・アスハ行くぞ！」

ユウキ・アスハ「ラジャ！」

ゴルザに攻撃を始めた

見た感じ強化されたゴルザではなく強化前のゴルザなためエネルギー吸収はないみたいだった

ゴルザは頭からビームを出して応戦してきた

俺は周りにあのピラミッドがあるか見回したが見つからなかった

「(ティガはいないんだな)」

応戦していると空からなにか来た

「あれってまさか」

俺が見たのは球体……『スファイア』だった

アスハ「なんでスフィアが!?いなくなったんじやなかったの」

スフィアはゴルザと合成はしず地面からバラバラとなった残骸でネオダランピアと
なった

「怪獣が二体に…カイトさん分離して倒しましょう」

カイト「そうだな。分離して叩く！俺はネオダランピアを相手する。ゴルザはユウキ
とアスハが相手しろ」

ユウキ・アスハ「ラジャ！」

カイト「フォーメーション2・1！」

その後分離して俺とアスハはゴルザの元へ向かった

ゴルザ「ギャオオオオオオオオ!!!」

「行くぞアスハ!!」

アスハ「足引つ張らないでよユウキ!」

「こっちのセリフだ」

ゴルザの攻撃をかわしながら攻撃をした
効いてはいるがあまりダメージを与えてなかった

「やっぱ今の武器じゃなにも」

アスハ「諦めずに頑張ろ!ダイゴさんとアスカさんだつて諦めなかったんだし」

「……………そうだな。もつと行くぞ」

アスハ「ええ行きましょ」

その後攻撃を与えていった

するとゴルザの攻撃を俺は受けてしまった

「くっそー！食らっちゃった」

アスハ「ユウキ！」

立て直したいがもう飛び続ける事ができないため緊急着地をした

なんとかかうまく着地をし俺はイーグルaから出てゴルザに攻撃した
でもさつきより効いていなかった

ゴルザはアスハに攻撃を止め俺に向けて攻撃をしてきた

俺は何とか避け攻撃をしたが銃のエネルギーが切れてしまった
なすすべがなくなってしまう

「もう手が」

そしてゴルザの攻撃が俺に向かってきた

でも俺は避けない……いや避けることが出来なくなつた

何故かは分からないがこのままではゴルザの攻撃を食らい俺は死ぬ

今アスハが俺を守ろうとしてもゴルザが放つたエネルギー弾の方が早く俺に当たる

アスハ「早く逃げて！ユウキ!!」

カイト「ユウキ！」

カイトはネオダランピアとの戦闘をしていたがアスハが俺に呼びかけていたことに気づき俺を見て言った

俺はゴルザの攻撃を食らい吹っ飛んだ

ドゴオオオオ!!!

アスハ・カイト「ユウキイイイイイイ!!!」

「……………つ……………ここは。確か俺はゴルザのエネルギー弾を食らつて……………そっか俺死んだんだな」

周りは真っ暗な所だった

すると目の前から小さな光が見えた

「あそこに光が」

・・・「君は死んではならない」

姿は見えないが誰かがいた

「あんたは？」

・・「その内…… いや……… 今知る」

「え？」

すると俺の身体中から光が輝きだした

「これは一体」

俺は暗闇から姿を消した

山にイーグルYがぶつかる
その時

ヒウウイイイイイイン!!
ガシツ!!

アスハ「……………これって」

ゴルザ「ゲXXXXXXXXXXXX」

……………」

そこにはあの巨人

アスハ『ウルトラマン……ティガ』

アスハを助けた巨人ウルトラマンティガはアスハが乗っているイーグルYを地面に
置いた

ティガ「テエア！」

ティガはゴルザに向かっていった

アスハはイーグルyから出てティガとゴルザを見ていた

アスハ「カイトさん……巨人です。ティガが……ティガが来てくれました」

カイトはゴルザの方を見た

カイト「本当だ。でもなぜティガが」

すると本部から連絡が来た

・『あれってティガなの？』

カイト「はい。アスハを助けてくれました」

・『そう』

カイト 『『リヨウ隊長』 どうします？ ネオダランピアもいますが』

リヨウ 『ティガを援護して。 なぜティガが戻ってきたかは分からないけど』

カイト 「ラジャ！」

カイトはティガを援護した

アスハ 「カイトさん」

カイト 『アスハ！ 今からティガを援護する』

アスハ 「ラジャ！」

カイトとアスハはゴルザと戦っているティガの援護をした

俺は光に包まれた時俺の右手になにか持っていた

「これは」

・・・「それを開け！そうすれば再びこの星に光が現れる」

「それって」

あれこれ考えても仕方ない
今はゴルザを倒す

アスハ「赤く点滅を……早く決着をつけないと。そうだ………ティガ！」

俺はアスハの方を向いた

ティガ「(アスハ)」

アスハ「もう時間がない！光線を出して早く決めないとネオダランピアを倒せない」

ティガ「(光線………そうか!) フツ！」

俺は頷きゴルザを向いた

両手を腹の横に置き前へクロスさせ横に広げてL字にし光線を放った

ティガの技……『ゼペリオン光線』をゴルザに向けて放った

攻撃は当たり倒すことが出来た

ティガ「(うまくいった)」

カイト「よし！」

アスハ「ゴルザを倒した。けど」

ティガ「(残りエネルギーはあと少しか……でも) ティア！」

俺はネオダランビアを倒しに行った

残り時間を計算し速攻で倒そうと動いた

いつ切れるかは分からないが、できることだけやろうとした

攻撃をしたがエネルギーが少ないのか力が少し抜けてさっきより威力が弱かった

ネオダランビアの攻撃で地面を身体中でつき俺の上に乗った

ティガ「グワ！（もう一度撃てば。でも今は間合いに。確かタイプが変わるんだよな……ティガはこのところでクロスして……パワータイプになってすぐに元に戻っ

て放つ」

俺は腕をでこにクロスさせ赤くなった

ネオダランピアを後ろに後退させ距離をとった

その後すぐに元のタイプに戻りゼベリオン光線を放った

ギリギリだったが何とか倒した

俺は膝をついた

肩で息をして

かなり大変だった

二体を相手に何とか倒したのだから

俺はまた光に包まれ消えた

気づくと元のサイズに戻っていた

「あれがティガ……ん？」

俺の懐に何かあり取り出した
すると

「これがティガに変身する」

取り出したのはティガに変身できる『スパークレンス』だった
見た後懐に戻した

アスハ「ユウキ!!」

アスハに呼ばれた

「アスハ」

アスハは俺に抱き着いた

アスハ「よかった… 本当によかった」

「迷惑かけたな」

アスハ「本当よ。でもなんで助かったの？」

「（明かすのはあれだしアスハには悪いが）あの巨人に… テイガに助けてもらったんだ」

アスハ「そうテイガに… 死んでなくてよかった」

「運がよかったんだよ」

通信が来た

カイト『カイトだ。アスハ無事か？』

アスハ「無事です。それと」

カイト『それと?』

「カイトさん」

カイト『ユウキか!?無事だったんだな』

「はい。テイガに助けってもらって」

カイト『そうかよかったな。今からそっちに降りる。もう少し待っていてくれ』

「分かりました」

カイトとの通信が終わった

アスハ「なんでテイガが現れたんだろう?」

「分からない。ダイゴさんは火星に住んでいるしなぜ現れたのか」

アスハ「私とユウキしか知らないもんね。あとは元GUTSの人たちが知っているぐらいだし」

俺たちは元GUTSの話にテイガⅡダイゴの話をしてくれた

もちろん元スーパーGUTSの人たちにも

でもリョウ隊長からはなにも言ってくれなかった

なぜかは分からなかったけど

そう思っているとカイトに拾われ俺たちは本部に帰投した

なぜ俺にテイガの力が宿ったのか全く分からなかった

その内分かるだろう

でも俺にはまだ分からなかった

この先強大なことに立ち向かうことを